

〔最終版〕 2025 年 3 月 18 日

報告書概要

ニュー・シルクロード構想の再確認

—— 進展から停滞へ ——

御器谷 裕樹

ニュー・シルクロード構想とは、公益財団法人日本グローバル・インフラストラクチャー研究財団（以下、日本 GIF と略称する）によって推進された、アジアにおける交通の統一規格構想である。1970 年代の冷戦下にあった世界各国は、多額の予算を軍事および防衛費に支出していた。こうした情勢に問題意識を覚えた中島正樹は 1977 年に世界公共投資基金構想（以下、GIF 構想と略称する）を発表した。同構想は、世界平和のためにファンドを設立し、貧困問題の解決や持続可能な社会の維持のために世界の叡智を結集することを志向していた。その後、GIF 構想は世界中から多くの支持を集め、様々なプロジェクトが計画された。

ニュー・シルクロード構想はこの大きな枠組みの中に位置づけられ、日本から中国を通過してスラブ・中東地域にかけて交通規格を統一化する計画であった。この構想は、その性質から主に中国への働きかけを主軸として推進された。1998 年に江沢民国家主席が訪日した際に小渕恵三首相と約 30 項目にのぼる共同プレス発表を行い、ユーラシア・ランドブリッジという形でこの構想は結実したように見えた。しかしながら、その後は顕著な業績につながることはないまま構想は表舞台から姿を消したようである。中国は AIIB や一帯一路構想などを掲げるものの、それらの中にはニュー・シルクロード構想に関する言及は明白ではない。ニュー・シルクロード構想はこうした政策にいかなる影響を与え、または与えなかったのだろうか。

ニュー・シルクロード構想に関する評価は定式化されているとは言い難い。本報告書は、現代における政策実行を所与のものとして扱い、その政策的起源をニュー・シルクロード構想と結びつけることで 1980 年代以降のアジアおよび世界における政策の機運を長期的な時間軸で詳らかにするものである。また、ニュー・シルクロード構想の歴史的変遷を振り返り、日本 GIF がいかなる活動を行い、それが日中両国の社会・政治（特に西部大開発や一帯一路政策）にどのような影響を与えたか、そして与えなかったのかを評価するものである。

本報告書では、ニュー・シルクロード構想に関する歴史的経緯を明らかにし、それを評価するために、日本 GIF の内部資料・報告書を中心に据えつつ、中国側の政府資料や関連する公開

情報を参照した。これにより、1970年代後半から本稿作成時点に至るまでの時期を主たる研究対象としてその経緯を丹念にひも解くものである。この歴史は、具体的には、1977年に中島正樹がGIF構想を発表した段階から、1998年の江沢民国家主席訪日時共同プレス発表、およびAIIB・一帯一路構想が台頭する2010年代までを俯瞰して検証するものである。さらに2025年1月時点で収集可能な情報を反映し、近年の一帯一路政策との比較検討を行うことで、構想がいかなる形で評価され得るのかを考察した。

具体的な研究資料としては、日本GIFが保管する報告書や会議録、提言書などを精査し、当時の具体的な活動内容や計画立案の過程を把握した。一方で中国側の政策動向を検証するにあたっては、『人民日報』や新華社通信による報道、さらには国務院および国家発展改革委員会（旧国家計画委員会）が公表する文書や政府公式ウェブサイトの情報を参照し、その中にニュー・シルクロード構想への直接的言及があるかどうかを調査した。これらの資料は中国における政策実施の実態を明らかにする上で重要であり、構想がいかなる形で政策化・制度化され得たかを見極める大きな手がかりとなった。

このほか、1980年代から1990年代半ばにかけて日本GIFが主催・参加した国際会議（イスタンブールやベルリンでのGIF会議、UNDPとの共同事業、1996年の「亜欧大陸橋周辺地域の経済開発」国際会議など）の議事概要や、参加者が作成した外務省向けの報告書も重要な資料として用いた。

研究対象時期の設定は、GIF構想が誕生した1977年から1998年の日中首脳会談、さらにその後の一帯一路政策が始動した2013年前後までを一つの区切りとし、最終的には2025年1月20日の情報更新まで含めることで、ニュー・シルクロード構想がどのように「進展と停滞」を経験してきたのかを長期的視野から明らかにしている。本報告書はこうした多層的な資料群を総合的に検証し、構想の歴史的意義とその影響範囲を再検討するものである。

調査を通じて明らかとなったことは主に以下のような内容である。

ニュー・シルクロード構想は、構想が共有された当初、様々な国家・研究者を魅了したものであった。1998年の江沢民国家主席が訪日した際に小渕恵三首相と約30項目にのぼる共同プレス発表を行い、ユーラシア・ランドブリッジという形でこの構想は結実したように見えた。しかしながら、その後は顕著な業績につながることがないまま構想は表舞台から姿を消したようである。

我々は、有意な形で結びついた資料を目にしていない以上は、構想が成功または結実したと判断することはできない。しかし、同時に失敗したと簡単に断定することも困難である。結局

のところ、中国が行った西部大開発や一带一路政策においてニュー・シルクロード構想が明文化されていないという現実を前にして、本報告書は同構想を停滞した具体化なき構想として結論づけるほかはない。

中国が提唱し、政策を実施している AIIB や一带一路構想については、日本 GIF が掲げた理念に実態としては近いものがあるかもしれない。しかし、それらを実質的に運用しているのは、中国という特定の国家であり、しかも権威主義体制である。このように、国境を超えた連携が、実際には特定の主体によって左右されることは日本 GIF が想定した構想と相反している。GIF 構想を提唱した中島は、冷戦下で戦争ではなく、世界平和のためのインフラに予算を回して途上国支援を行おうと企図した。しかし、こうした構想は、組織運営の観点からも、資金的にも限界があったといえる。こうして、日本 GIF が構想した不偏不党で地域および世界に役立つ統一規格の夢は、中国が権威主義体制の管理下で私物化する形で実現されてしまったと考えられる。

本報告書は、日本 GIF が持つ資料や公開情報にあたることで、ニュー・シルクロード構想の萌芽、成長、停滞という段階を追って整理した。こうした資料的なバイアスは、構想が社会的政治的にいかなる位置づけにあったかという実態を知る上で障壁となっていたと考えられる。日本 GIF に関わる協力者が持つ資料、日本政府の内部資料、中国政府の内部資料など、未公開の資料を突き合わせてみることでようやくその全貌は明らかになるだろう。